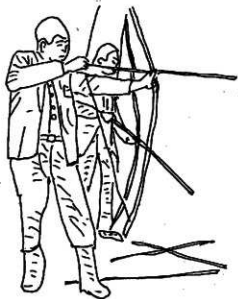




種子島の正月行事

くさいもん
このみやじょう
しゅうたつき



種子島の正月行事表

日付	主な行事	説
一日	◇水迎え ◇氏神初参り(高一宮神・御霊) ◇シユエイ(潮井)とり(全島)	上の行事の他に次の行事があるところがある。 ○チイナビキ(平山の中の町向井里だけ) ○水迎え祝い(山田家ほか)○浦祝い
二日	◇臼起こし(全島)◇舟祝い(全島) ◇礼言い(全島)	○仕事はじ ○幕参り(礼言いに行つて幕参り) ○系図祝い ○網祝い
三日	◇系図祝い(高野・高野)	○町折祷 ○浦祝い
四日	◇野の畝入れ(全島)	○系図祝い ○町折祷 ○お通夜
五日		○浦祝い ○系図祝い ○町折祷
六日	◇ガラ、ナラシバを焚く、狂言をま。	○火入れ折祷 ○町折祷 ○よこしあえ
七日	◇鬼追い(ハマガシの葉を焼く) ◇くさいもん ◇七草粥(全島)	☆ <small>くさいもんは七草、土蔵に、懸札にもま。</small> 二才入りの祝いでもある。
八日	特に行事なし	
九日		
十日	◇田の畝入れ(全島)◇系図祝い	◎大的开始 ◎温座祈念 ◎田の神祭り
十一日		
十二日	特に行事なし	
十三日		
十四日	◇ゴースン(Grasshopper)の舞 ◇穂垂れ引き(カサワガユ) ◇巫舞い(ケニト、舞の舞は舞臺の舞)	○左巻き(狂言)作る、○田の神祭り
十五日	◇カシワガユ(全島)◇穂垂れ引き ◇ハマ折祷 ◇辻札	
十六日	◇山の神祭り(山仕事をする人)	
十七日		○町折祷 ○お満 ○ハマ折祷
十八日		○ハマ折祷 ○町折祷(高野・高野)
十九日		
二十日	◇門木倒し ◇ハマ折祷	
旧正月		○各家庭毎に祝う、(幕参りに行く家を除く)

◆ くさいもん (福祭文)

(由来)

全島的に行われる。各部落毎に歌詞が少しづつ違っているが、基本形は同一である。この行事がいつ頃から始まったか定かでないが、分布の度合いや歌詞体系の様子から推して、中世あたり起源が求められそうである。家々では、ハマガシの葉っぱをバチバチ焚いて、鬼を追い出してから、くさいもんの行事を迎える。中種子町屋久津では「福祭文」を歌う、鬼はホカ、福は内、鬼殿はようこそおじゃつた。明年もおじゃれ。隠れみの、隠れ空、打出の小槌、いろいろかすみに置いておじゃれ、取つてこい、煎った大豆をおやつた(生えた時)おじゃれ」といって、豆を撒いて災鬼を追い出す。この後に「福祭文」を迎えるところが多い。

「福祭文」は福の神を迎える意味、又は祭文を氏神に供えてから行うことから「供祭文」或いは、各門毎の福を祝って廻ることから「福殿門が正しい」などの考え方があがるが、「福祭文」が部落の神社の拝殿の前に集まり、「福祭文」を歌う、歌い終わると「部落の神保」がお神酒を一人ずつ注いでくれる。その後、神保の家の玄関に行き、「福祭文」を歌う。この後、本来は、部落の各戸を祝って廻るのだが、今日では、公民館に行き、有線放送を使って、各戸へ伝える。各家では、老人、婦人、子供たちが「福祭文」の放送を正座をして聴き入る。

(歌歌詞) 福祭文

そーらいや候よ くさいもんや候よ これのご亭主の御座敷は いつもよりも今年は

門の松が栄えた 栄えたも道理よ 四方の隅に泉酒が溢えた 溢えたも道理よ

白銀のまげ桶に 黄金ひしゃくで汲み替えた (以下 略)

これにこそや道理よ いつよりも今年は 門に松が栄えた 栄えたも道理よ 鶴と亀が

舞い来た 舞い来たも道理よ これの殿の身内に 銭と米を祝うよ 祝うこそや道理よ

銭花が蓄うで 黄金花が咲いたよ 咲いたこそや道理よ 四方の隅に泉酒が溢えた

(以下 略)



か
五
舞
い
（玉虫宮城？）

（由来）



（歌詞）

「カーゴマー」という。西之表各地では、「コノミヤジヨウ」といい、訛って「コノミナジヨウ」ともいう。南種子町では、平山、荻水、上中などで、中種子町では、坂井の本村や東目、田島でも行われる。南種子では、青年が主体で舞いがつてきて踊るが、西之表では、門の外から歌うだけである。舞舞いは、家の中に入つた方から、始まるが、青年（男のみ）達が各戸を祝って廻る。その後を子供たちと呼ばれる（ロクロイ又は柳の小枝につけた餅）餅と鏡餅を入れる。青年の一人は白頭巾で女装、白足袋でセンスを持つ。もう一人は、芸廻り（げいまー）といって、ひょうきんな格好をし、腰に徳利を下げる。他の青年たちは、太鼓、鐘をもつ者二三人、他は素手で歌う。さて、家の玄関の戸を少し開けて、「お祝い申す」といってから、歌い始める。女装と芸廻しは、座敷に上がつて、礼をし、舞い始める。やがて、座敷の隅に懸けてあるゴリを取って、かたがてセンスを開いて舞う。芸廻しは遣化役である。家の人々は、下の座から見て入る。踊りがすんだら、主人は、「ありがたうござり申した」と言って、用意の盃を差し出し、一杯飲ませる。ゴリはもたらって帰る。鏡餅をくれるところもある。西之表では、歌詞もくずれているが、南種子では舞い、歌詞ともにしつかりしている。起源は定かでないが、本土からの伝わったものでなく、種子島で出来上がったものと考えられている。白頭巾の女装は盃を表すものという。その昔、養蚕振興のために、小正月の夜、仮装神人が来訪するという形式である。



「これから申す 門から申すよ この家は 家は 裕福舞いの家と見かけ申すよ
ましてこの家 祝うておじゃるどうから 祝い申すよ 九十九階のこの宮城を廻
します先に 綾をはえ 錦を広げ やだらんらんと とくとふませて これより
東のあさびらの時のケンケン鳥のめん鳥の 右のおどり羽根 左の風切り おつと
り合せて ひと羽根貝ですくえば 千枚すくう 二羽根貝ですくうえば 二千枚
三千枚の盃種子を寄せよ集めよ アリ児になるときや あいだいだいと申すよつ
づれ児になるときや つるつると申す 春蚕になるときや 雨桑も嫁わず 露桑も
嫁わず 飾児になるときや ハジの芽を召す 赤まゆ白まゆ かがせ給うれ その
まゆの固さは 天河原の石よりも固うござる どの駒か春駒の勇む如くに 夢に見
てさへものうまきものよ 母上様かよ 今日のお祝い落しんせ。」

◆ 破魔祈禱（ハマギトウ）

正月十五日から二十日にかけて、全島的に行われる。シウブのハマ（勝負の浜）ともいい、尚武の破魔ともいふ。二十日の破魔というところもある。十五日と二十日の適當な日にするところもある。神官の都合によって決まる。神式または仏式のところもある。中種子町町山崎では同一集落で宗派によってニグルブに別れて行う。破魔祈禱は、集落の繁栄、安泰、一家の繁栄、安泰を祈願するもので、「町祈禱」と一緒になっている。「町祈禱」が済んでから、ハマ行事に入る。弓的を射って、吉凶を占う。

（現和浅川では「ハマ」とも「テンチウウころばし」とも「シウタころばし」ともいう。「シウウタ」はシブタともいい、三角間で編んだナベの蓋だともいう。）

◎ 八 現和本村の事例

各家庭では、「作祝い」といって、農機具を家の縁側に並べて、御膳（吸い物、餅、カシワイチゴ、米、塩、大豆）を供える。集落全員、氏神の庭に集まって、祈禱し、各戸毎にオフダを貰い、又、集落の入口にはフダ（辻札）を竹に刺して立てた。昔は、弓を引いて、平木を的に射って、その割れたものを竹に挟んで立てた。これは、悪魔がここまで来ると、集落内に入ってこないのだという。又、昔は、「ヤカズ入り」といって、疫病が流行していない方向に向けて射った。

又、矢を集落の戸数分だけ作って、疫病が流行していない方向に向けて射った。

祈禱が済むと、いよいよ「シウウタ転がし」である。天神様の庭で、トニン（集落の世話役）がシウウタを転がす。転がす人は東西に二人いる。東の人が、片袖ぬいで「よか年頭のお通り馬場通り」と掛け声して転がす。西の人が拾って、返しを行う。同じ文句をいう。すると、南北に別れている人達（戸主）が、一間の長さのニガ竹を持って、転がってくるシブタをいう。すると、南北に別を通したら、その一年は豊作。転がし方が速いので、なかなか難しい。五メートル位のところから転がす。つぎに三回目を転がす。二回目は上之町の人が突けば、三回目は下之町の人たちが突く。三回目まで転がす。その後は、氏神で宴会。昔は、白足袋、紋付きハカマで行った。昔は、突いた人の家で祝いをした。それに当てようとして、竹に油を塗って、稽古までして行っていたという。当てると、悪魔を突き抜けて、円満に通った」といって大喜びだった。

しかし、この形態は集落毎に少しずつ変形している。

